

八十木先生を悼む

高野 秀夫

(前・短大英文科主任)

八十木先生と親しくお話をするようになったのは駒澤大学北海道教養部に勤めている時でした。石狩平野が一望に見渡せる小高い丘に建つ二号館の校舎。その3階にある研究室の隣りあわせの席で、お互いに時間の経つのも忘れて、熱心にいろいろな事を語り合ったことが懐かしく思い出されます。岩見沢は北海道でも豪雪地帯として知られるところです。しんしんと降り積もる雪の中、先生は嫌な顔も見せずに何度も私を車に乗せてくださいました。先生はどんな仕事も手際よくこなし、気配りのできる、誰からも好かれている人でした。半年が雪で覆われる北国の大地で、長い年月を経て育まれた先生の忍耐と寛容の精神はまさに、駒澤の精神と言えます。毎日が目まぐるしく変化し、人間関係も粗雑になってきている現代社会において、先生のように職場に安らぎをもたらしてくれる人柄の存在は大きいかったと思います。

大学も厳しい時代を迎え、職場も様変わりする中、見識ある大学人としてしっかり足場を固め、外国語部の中でも将来を大いに期待されるほどご活躍されました。良き教育者として学生を懇切丁寧に指導し、英語教育では岩見沢時代に三島出先生と共著で児童英語教育の本を出版されました。研究者として、英語学では描出話法の論文、英文学では19世紀の女流作家、エミリー・ブロンテの研究に励まれました。近いうちにブロンテ協会から、先生の最後の仕事になってしまった翻訳が出版される予定です。また学外の活動の仕事にも、いろいろ携わっておられました。

昨年12月に病に伏されましたが、大学に迷惑をかけるのを嫌い、9月からの職場復帰を念頭に治療に専念されていました。常日頃、我が夢実現のために脇目も振らず頑張る人生観を貫き通しました。自分の意に反して他人に迷惑をかけながら毎日を過ごすよりは、太く短い人生を願う、と言っていた言葉が思い出されます。外国語部の発展を切に願い、尽力を惜しまなかった先生の精神は、いつま

でも生き続けることでしょう。

先生は学生時代から、駒澤一筋の人生を過ごされました。青春時代には、路面電車の多摩電に乗り、昔の古い本館の校舎を急いで歩き、若き血潮を漲らせて、よき友人と人生を語り合い、生涯の最良の伴侶にも出会いました。先生の思い出に満たされた学舎は、今いよいよ冬の季節を迎えようとしております。北海道では雪が降っているとの事です。

八十木先生のご冥福を心よりお祈り致します。

平成15年11月24日